SDGs の達成に向けた共創的研究開発プログラム（シナリオ創出フェーズ）
令和 4 年度採択プロジェクト　事後評価報告書

2025 年（令和 7 年）3 月

研究開発プロジェクト名：高速データ通信と AI 技術による豪雪中山間地における新しい健康づくりのためのシナリオ創出
研究代表者：菖蒲川　由郷（新潟大学大学院　特任教授）
協働実施者：小林　良久（十日町市役所市民福祉部地域ケア推進課　課長）
実施期間：2022 年（令和 4 年）10 月～2024 年（令和 6 年）9 月

総合評価

一定の成果が得られたと評価する。

本プロジェクトは、高齢化と人口減少による医療とケアへのアクセスの課題に対して、デジタルデバイスを活用したシナリオを示すとともに、ヘルスデータの活用により地域の健康課題を把握し、社会的処方により人々のウェルビーイングにつなげていくことを目指すものである。

モバイル診療や 5G 通信の確立を主なテーマとしていた当初の提案から、プログラム・マネジメントとの協議を通じ、地域における健康向上そのものを主題とするために社会的処方に取り組み、柔軟に対応した点を高く評価する。研究開発期間中に社会的処方の意味・意義・価値について可能性試験を通じて明らかにし、それに付随する社会的課題も指摘された。今後、デバイスの活用や人材育成について改めて注目することで、より効果的なデバイスの活用・人材育成の手法を開発することを期待する。

項目評価

１．目標の妥当性

目標は妥当であったと評価する。

地域における高齢化と人口減少による医療やケアへのアクセスの課題を解決するうえで、適切な目標が設定されていたと評価する。研究開発期間中に「収集したヘルスデータを基に地域の健康課題を把握し、社会的処方の手法を検討する」ことを目標に加えたことも評価に値する。高齢化、過疎、不十分な医療環境への対処として、新潟県十日町市と連携・協働して健康維持のために ICT や AI を活用した解決策を検討するという提案は時宜を得たものであり、同様の課題を抱えている国内外の多くの自治体への応用も期待できる。今後は AI 技術の中身がより明確化されることを期待する。

２．研究開発プロジェクトの目標の達成状況および研究開発成果

プロジェクトの目標は達成されたと評価する。

「モバイル診療・見守りユニットの稼働」と「5G 医療データ通信の確立」について取り組みが進められたものの、通信の設備・機器の整備や性能が期待通りでない部分も大きかったため、プログラム・マネジメントから「ヘルスデータ活用の検討」と「地域をつなぐ人材育成構想」に、より重点を置くよう求め、これに従い社会的処方が試行され、少数ながら有効性が確認できたことを高く評価する。また、社会的処方についての公開勉強会を開催し、地域へ働きかけた点も評価する。今後は、リンクワーカーを誰が担うのか、通常業務に加えて実際のマネタイズはどうするのかなどの検討がさらに進むことを期待する。

３．研究開発プロジェクトの運営・活動状況

プロジェクトの運営・活動状況は十分に妥当だったと評価する。

臨床にも従事する自治体が協働実施者となったことにより、研究代表者が実践や情報の収集等をスムーズに進めたことを評価する。マネジメントチームとの協議内容も反映させながら、データから課題を焦点化して柔軟にプロジェクトを運営した点も高く評価する。社会的処方を実現するための課題の抽出やネットワークの構築なども積極的に行われた。今後は、社会的処方の多地域展開という観点から、その担い手となりうる人材の確保や育成を期待する。

４．プロジェクト終了後の事業構想(研究開発成果の活用･展開の可能性)

プロジェクト終了後の事業構想は、概ね描けていると評価する。

社会的処方を軸とした事業構想について、エビデンスも踏まえ、社会的処方をさらに拡張･汎化する着実かつ未来への広がりを感じる内容であり期待できる。社会的処方による過疎地域の医療問題の解決へ地域のリソースを活用するという道筋は出来ている。今後は、「社会的処方」とは何かをより具体化するとともに、既存のヘルスデータに基づく地域疾病の特性に対し、モバイル健診やリンクワーカーなどによる社会的処方としての介入が、どのような意識変容、行動変容、健康改善に結び付いたかについて検証が進むことを期待する。

５．その他

なし